



ジョルジュ・サンドの『ガブリエル』と教育の問題

坂本, 千代

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 53:53*-69*

(Issue Date)

2019-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011957>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011957>



ジョルジュ・サンドの『ガブリエル』と 教育の問題

坂 本 千 代

ジョルジュ・サンドの数多くの作品の中で、おそらく「恋」「結婚」に次いで頻繁に取り上げられるトピックは「教育」、それも女子教育の問題であろう。サンドは自分の受けた特殊な教育、自分が息子や娘に施そうとした教育、のちには孫娘たちの教育、そしてそれらについての様々な考察を通じて、教育というものの重要性や理想の教育についてはっきりした見解を持っていた。本稿ではサンドの対話体小説『ガブリエル』（1839年）に、当時のサンドの教育観がどのように投影されているか、また彼女の晩年の作品中ではそれがどのように変化したかを考察する。

具体的には、まずこの作品に関する主要な研究を一瞥したあと、主人公ガブリエルに施された「男性至上主義教育」について考える。次に、「天使」あるいは「第三の性」としてのガブリエルというテーマについて、同時代のテオフィル・ゴーチエの小説『モーパン嬢』と比べながら検討する。最後に、サンドの晩年の女子教育観がいかなるものであったかを、女主人公の教育の問題が大きな位置を占める小説『マドモワゼル・メルケム』（1868年）を取り上げて考えてみたい。

1. 作品成立とおもな研究

サンドはショパンや子どもたちとともに地中海のマヨルカ島で一冬を過ごし、あと、フランスに帰国した1839年春に『ガブリエル』を執筆した。『両世界評論』誌に連載されたあと、1840年にこの作品は単行本として出版された。『ガブリエル』は1867年にミシェル・レヴィ版として出版されたあとほとんど注目されなかったが、1988年になってジャニス・グラスゴーが序文を付けて、

フェミニスト系の出版社デ・ファムからこの作品を再刊して以来、サンド研究者などのあいだで注目を集め、研究論文などが現れるようになった。2013年にはベアトリス・ディディエ監修のサンド全集の1冊として詳しい注やヴァリアントの情報がついたシャンプイオン版が出た。また、2019年にはマルティーン・リードの監修・序文つきのフォリオ版が出ている。

『ガブリエル』は戯曲のような形式を持つ対話体小説である¹。舞台はルネサンス時代とおぼしきイタリア。ガブリエル（Gabriel）は生まれてまもなく両親をなくし、父方の祖父の意向により、人里離れた城館で男子として育てられた女の子であった。祖父のブラマンテ大公は次男を憎んでいて、男子のみが受け継ぐ爵位や財産を次男の息子アストルフが継ぐことにならないよう、長男の遺児を男子として育てさせることにしたのであった。ガブリエルは18歳になった時に自分の出生の秘密と陰謀を知り、祖父の財産の正当な継承者であるはずのいとこアストルフを探し出す。若いふたりは恋に落ち、ガブリエルは女性としてアストルフと暮らすが決意するが結局うまくいかなくなる。ガブリエルは男としての生活に戻り、近い将来祖父が死亡の際にアストルフが財産を継げるよう手続きをしてローマを去ろうとするが、真実を知って激怒した祖父が放った刺客によって暗殺される。以上がこの作品のあらすじである。

1988年のデ・ファム版以降、この作品に関するさまざまな研究が発表された。それらの内容については、だいたい『ガブリエル』の「ジェンダーの問題に注目するもの」「両性具有のテーマに注目するもの」「異性装のテーマに注目するもの」の3つのグループに分けられるように思われる。その代表的なものは次のとおりである。

まずジェンダー問題を中心に論じたものとしてヴェロニカ・ヒューバート・マッシュューズの論文『「ガブリエル」あるいは性同一性に関するサンドの考え』²（1994年）を挙げることができよう。ヒューバート・マッシュューズは、サンドがこの作品において性的アイデンティティの基礎についての問題を投げかけているとし、その女性性が打算的なもくろみのためにねじ曲げられあやつられた主人公を登場させることによって、家父長制度の基盤となっている「女性の搾取

のシンボル」を創造したのだと主張している。

次に、本作品中の両性具有のテーマに関する論文の代表的なものとしてパスカル・オーレ・ジョンシエールの「不要な暴露：ゴーチエの『モーパン嬢』とサンドの『ガブリエル』における両性具有形象に関する社会美学的争点」³（2012年）がある。この論文では『モーパン嬢』と『ガブリエル』の両方に、主人公の性的あいまいさおよび性別暴露のシーンがあることに注目している。オーレ・ジョンシエールによれば、この2つの小説を社会的側面から考察すると、利益追求型社会における芸術家と理想の美との関係（『モーパン嬢』）、および家父長制度における女性の疎外（『ガブリエル』）について作者たちが問いただしていることがわかり、この観点からすると両性具有者や「天使」は男性性や女性性の本質について考察するさいに非常に示唆的な役割を果たしているのがわかるのである。

日本のサンド研究者も『ガブリエル』に注目してきた。たとえば日本ジョルジュ・サンド学会編『200年目のジョルジュ・サンド』（2012年）の第1章では新實五穂が「性を装う主人公 『わが生涯の記』『ガブリエル』」⁴と題してこの作品について論じ、ガブリエルの異性装は結婚制度や家族制度に由来する女性の隷属状態を告発する装置の役目を担っていると結論づけている。

『ガブリエル』においては幼い頃から主人公が受けてきた教育が決定的に重要な役割を果たしているのであるが、この点について重点的に論じた研究はまだないようである。本稿冒頭で触れたように、サンドにとって「教育」はその作家生涯を通じて探求したテーマのひとつであるため、以下ではガブリエルの受けた教育とその結果について考察することとしたい。

2. 男性至上主義教育

『ガブリエル』のプロローグでは、主人公の出生の秘密やどのような育てられ方をしたのかが、ガブリエルの家庭教師である神父と祖父ブラマンテ大公の会話で明らかになっていく。

（家庭教師）彼はしっかりした、実に男性的な勉強をいたしました。

（大公）ラテン語やギリシャ語を学んだのだな？（・・・）そして、歴史、哲学、文学はどうだ？（・・・）

（家庭教師）彼は勉強好きで、激しい運動、狩、武器、競走も好きなのです。⁵

ここで男性的な（viril）勉強という言葉が出てくるのに注目したい。19世紀までのヨーロッパにおいて、教育を受けられる層に属する男子と女子にはそれぞれ違った教育を施すべしというのはいわば自明のことであった。ジャン・ジャック・ルソーの『エミール』（1762年）においても、男子エミールとは非常に異なった教育を女子ソフィが受けるのはよく知られた例である。

ガブリエルは家庭教師の施す男性としての教育を十分活用し知的にも体力的にもすぐれた理想的な青年となったのであるが、ここではほとんど同じ頃に出版されたゴーチエの『モーパン嬢』を見てみよう。これは女子として教育を受けたマドレーヌ・ド・モーパンがある時から男装して、男として生きていく物語である。いわば女性としても男性としても生きた経験のある彼女は、その女友だちあての手紙に次のように書いている。

哀れなものね、女の子なんて。慎重と沈黙という三重の壁に純潔を守られて、注意ぶかく大切に育てられ、一何も理解せず何の疑問も持たないようにしつけられる。最上の学問は無知というわけ。おかしい誤解を吹き込まれ、惑わしの夢想（キマイラ）にあやされて育つ私たち！⁶

「最上の学問は無知」という教育の結果どのような女性ができあがるかというテーマは『ガブリエル』でも展開されることになる。ところで、『ガブリエル』のプロローグでは、主人公が男性としての教育を施されただけでなく、実はもうひとつ重要な刷り込みを幼い頃からされていたことが明らかにされる。それは「女性の劣等性」である。その検討に入る前にここで18世紀末か

ら19世紀前半に広く読まれ、大きな影響力を持っていたジャンリス夫人の『アデルとテオドル、あるいは教育についての手紙』（1782年）という本に目を向けてみよう。サンドもおそらくこの著作を読んでいたようである。これはある男爵夫妻が幼い息子と娘の教育のためにパリを離れ、南仏ラングドック地方の田舎の城館で理想的な教育を実践するという筋立ての書簡体小説である。物語の初めのほうで男爵夫人は、自分たちがこのたび移り住んだ館の内部について詳しく書き送っている。館の壁面という壁面はオウィディウスの『変身物語』のエピソードの絵画、ギリシア、ローマ、フランスの歴史やそこに登場する男女の偉人たちのエピソードを題材としたタペストリーや絵画が出来事の年代順に配置されており、子供たちは毎日それを目にして、ごく自然に古典や歴史を学ぶことができるように配慮されているのである。

それではガブリエルの住む館はどうなっているのだろうか。サンドが明らかに『アデルとテオドル』を読んでいたとわかるのは、家庭教師が語るガブリエルの館についての次のような言葉からである。

彼〔ガブリエル〕が最初に見た絵、彼の意識をめざめさせた最初の歴史の特色は女性の弱さと従属を表し、男性の自由と力を表現するものでした。あなた様の命令で私が創作させたフレスコ画を羽目板の上にご覧になることができます。こちらはサビニーの女たちの略奪、あちらはタルペイアの裏切りです。それから、ダナオスの娘たちの罪と罰。向こうはオリエントの女奴隷の売買です。他には、捨てられた王妃たち、恋人に軽蔑されたり裏切られたりした女たち、亡き夫を燃やす薪の上で焼き殺されるインドの寡婦たちがいます。いたるところで女性が奴隷にされ、所有され、征服されており、鉄の鎖を払いのけてももっとつらい苦しみにも陥るだけであり、その鎖を断ち切るには嘘、裏切り、卑怯で無用な犯罪しかないのです。（43-44）

これはまさに『アデルとテオドル』の男爵夫妻の教育法をそのまま模倣

して、教育内容だけを自分たちの都合に合わせて入れ替えたものだとわかる。このような絵画でいっぱいの館に暮し、乳母以外の女性とは接触を持たず、自分が女性であることも教えられずに育ったガブリエルではあるが、彼女は女性に対して「恐れと同情と共感と憎しみのまざった」（44、家庭教師の言葉）感情を持つようになったのであった。そののち第3幕で、女性になったガブリエル（Gabrielle、これは Gabriel の女性形で発音は同じ）はアストルフの母やその館の人々から冷たい仕打ちを受け、それに憤るアストルフに対して、次のように言う。

お母さまを責めてはいけません、あなた。あの方は年取っていて、女なのです！偏見に打ち勝つことができず、自分の本能を抑えることができないのです。避けがたい悪に抵抗するのはやめてください。（171）

このように、女性となったガブリエルの目にも女性は無知で非理性的な生き物だと映っているのである。この小説に出てくる女性たち（高級娼婦のフォースティナ、アストルフの母セッティマ、そのコンパニオンの老嬢バルブ）はみな愚かです見の狭い人物とされている。男性登場人物たちが、アストルフのみならず、従僕のマルクや、ガブリエルと決闘するアントニオでさえ、それぞれ個性と人間としての厚みのある人物に設定されているのとは非常に対照的であると言えよう。

さて、男性としての教育を受けて育ったアストルフは当然のように女性を上から見下した評価をし、「理性の働きの助けがなかったり、知性の力による抑止力がないのは人間、とりわけ女性の傲慢さの宿命だ」（176）と言う。それに対して、女性となったガブリエルは次のように答えるのである。

ああ、男たちの中で最良の人たちでさえ、女に対して深い愛情も完全な尊敬も持っていないことがわかりました。私が子どもの時に、女は地上で最も卑劣で最も不幸な役割を演じているとあれほど念入りに教えられたのも

道理です。(176-177)

ここに見られるような男性至上主義とそのコインの裏側である女性の蔑視は、『モーパン嬢』ではもっと辛辣な形で表明されている。主要登場人物のひとりダルベールは親友に「ぼくの見るところ、キリスト教も女性の名誉回復に寄与しなかった。ぼくにとっては、女はつねに男とは異なる何か劣ったものだが、しかし愛すべき遊び相手、象牙や金で造った赤ん坊のがらがらよりは利口で、地面に落としても独力で起き上がる玩具だ。⁷」と書き送り、女性であるマドレーヌも「娘の生活なんて、人間の生き方とは言えません。苔や花みたいな植物の暮しです。⁸」と嘆くのである。『ガブリエル』の第4幕になると、日に彼女を束縛して自由を奪っていくアストルフとのあいだでは次のようなやりとりが生まれることになる。

（アストルフ）君はなんて寛大なんだ、ああ、まことの男の心だ！（彼は彼女を抱きしめる。）

（ガブリエル）ほら、あなた。私をととてもほめる時でさえ、男性的美点しか見つけられないのね。(192)

男として育てられたガブリエルは、このように貴族の若い男性としては申し分のない能力と美点を備えていたのであるが、女・嫁としてアストルフの母やその取り巻きの前に登場すると思いがけない批判の嵐に見舞われることになる。それを見る前に、先に取り上げた『アデールとテオドール』の男爵夫人の意見を読んでみよう。彼女は女の子の教育について次のように述べている。

女性のイマジネーションを燃え立たせ、頭脳を夢中にさせるようなことは注意深く避けなくてはなりません。女性たちは単調で従属的な生活をするために生まれてきているのです。彼女たちには理性、やさしさ、感受性、暇と倦怠に抗する能力、ほどよい趣味が必要であり、情熱はまったく必要

ありません。天才は彼女たちには不必要で危険な才能です。天才は彼女たちを女性の立場の外へ出すか、不愉快な思いをさせるようにしかならないのです。恋愛は彼女たちを惑わせ、野心は彼女たちを陰謀にしか連れていきません。科学への好みは彼女たちを目立たせ、家庭の義務の単純さや彼女たちが華をそえる社交界から女性たちを引き離してしまいます。⁹

アストルフの実家でのガブリエルは、普通の女性として日中は姑やそのコンパニオンとともに刺繍をする。ひんぱんにやってくるコーム神父（姑の懺悔聴聞僧でそのアドヴァイザーの役目も担っている）の相手もしなくてはならない。楽しみはアストルフと馬に乗って一緒に狩をすることだけであるが、立派な馬の維持費を浪費だと批判される。また、教会の許可した本以外読まない女性たちは、彼女をダンテの『神曲』を擁護する不信心者、異教の本を読む者と非難するのである。彼女のたぐいまれな知性や博識はまったく評価されず、馬術¹⁰や剣技に秀でていたガブリエルは、刺繍もうまくできない不器用な女として白い目で見られるのである。しかし、嫁の素性とそれまでのいきさつを知らずに彼女を非難する母をとがめるアストルフに対して当のガブリエルは次のように言う。

女性の衣服と役割に戻っても、それによって、男性としての教育が私のうちで発達させた、精神的な偉大さを求めるこの本能や力による冷静さを失ったわけではありません。私にはつねに自分がひとりの女以上の何かであるように思われるのです。（172）

「男性としての教育」がまさに彼女を作り上げたのであり、それが彼女を「女以上の何か」にしたとガブリエルは言い、ここにははっきりとジェンダーと教育の関係性に彼女が気づいていたことが示されている。また、小説の終わり近く、アストルフの自分に対する裏切り行為を知ったあとも、彼女は「無為と、無名であることがアストルフの重荷になっていることもわかっています。男で

すから！愛と内省のみの生活では彼は満足することができないのです。」(258)と言って彼をかばう。ガブリエルはこのように、最終的には女性とも男性とも距離をおいているかのようだ。肉体的には女性に生まれながらも男性として教育を受けたこの人物はいったい何者となったのだろうか。

3. 第三の性あるいは天使

ここでもう一度『モーパン嬢』に戻ろう。これは現代であればおそらく性同一性障害と診断される人物の物語である¹¹。マドレーヌは男装してテオドル（神の贈り物という意味）と名前を変えて旅をするのであるが、そのことについて「男装のおかげでわたしは女性から離れ、女の対抗意識も消えました。女性のことなら、だれよりも正しい判断ができます。—わたしはもう女ではないけれど、まだ男でもありません。¹²」と書き送る。そして、この状態からさらに次のように断言できるまでに成長していく。

本当のところ、わたしは男性でも女性でもないのです。わたしは女性の愚かな忍従も臆病も狭量も持たない、さりとて男性の悪徳、嫌らしい放蕩癖、粗暴な言動にも無縁です。—わたしの性は、まだ呼び名のない特殊な第三の性なのです。¹³

一方『ガブリエル』では、第3幕で姑の冷たさや批判にも超然として自尊心と品位を失わないガブリエルに向かって、アストルフは次のような称賛の言葉を述べている。

愛しい人！君ひとりだけで全女性を合わせたより偉大なんだ。君がそう思いたければ、それは君が受けた教育のおかげだとしてもいい。だが、それは君の天性のものだとぼくは思う。奇妙な運命や、あらゆる法則からの規格外の生活がなくても、君は神のお作りになられた傑作だと思う。(172)

アストルフはこのようにガブリエルの特殊性、女性としては例外的な優秀さを指摘し、さらにそのあとで「君は自分で思っているような、半分男で半分女などではなく、人間の形をとった天使なんだ」（176）と言う。

ガブリエルのほうは、すでにプロローグにおいて家庭教師に向かって「あなたがぼくにしばしば証明しようとしていたのとは反対に、ぼくは自分の魂に性別があるとは感じられないのです」（49）と告白しており、さらに、前の晩見た夢について次のように話している。

（ガブリエル）夢の中でぼくは地上の住人ではありませんでした。ぼくには翼があって上へ上へといくつかの世界を通り抜けて何かわからぬ理想の世界にのぼっていきました。周りでは崇高な声が歌を歌っていました。誰も見かけませんでした。でも、軽く輝く雲が大空をとおっていてぼくの姿を映し出していました。ぼくはひらひらする長いドレスを着て花冠をつけた若い娘でした。

（家庭教師）それではあなたは天使だったので、女性だったわけではありませんよ。（53）

ここでも主人公にたいして「天使」（ange）という言葉が使われていた。そもそもガブリエルという名前も、キリスト教の大天使の名前に由来しているのである。男でもなく女でもない存在、そのような規格外の存在が天使であり、これはモーパン嬢の言うところの「第三の性」に通じるものであろう。

以上のことから、『ガブリエル』において注目すべきは次の点である。アストルフが（これは『モーパン嬢』のマドレーヌの場合も同様であるが）、ガブリエルは生まれつき特別な存在（天使）であると言うのに対して、ガブリエルのほうは、もともと自分の魂には男女の区別はなく、男としての教育を受けたことによって他の女性たちとは違ってしまったと主張していることである。ガブリエルにとっては、自分の受けた男としての教育の影響は彼女の存在、アイデンティティの基本となる最も重大なものだったのだ。作者サンドは少女時代

にパリの修道院で上流階級の娘のための教育と、田舎の屋敷で家庭教師から男子のような教育の両方を受けた。それらがどのようにその後の彼女の人生に影響を与えたかは回想録『我が生涯の記』（1854-1855年）などで語られており、女子教育についての考察は作家サンドのいわばライフワークのひとつでもあったのである。

4. 最良の女子教育

1867年63歳のサンドは小説『マドモワゼル・メルケム』¹⁴を発表した。それは次のような物語である。アルマン青年はノルマンディーの叔母宅に滞在するうち富裕な隣人のセリー・メルケムと知り合う。彼女は自分の家庭教師だったベラックという老科学者とともに研究に打ち込む生活をしていて周辺では変わり者扱いされていたが、アルマンは彼女に恋するようになる。セリーは近くの漁村で漁師たちとともに難破船の救助をおこなったり、村人の生活を様々な形で援助して、彼らに崇拝されていた。彼女に恋する別の男のせいでふたりの関係が紆余曲折を経たのち、最後には固いきずなで結ばれてふたりは結婚することになるという結末である。

ヒロインのセリーは幼い時に両親をなくして祖父メルケム提督に育てられ、ベラックから教育を受ける。彼女は誰にも強制されることなく、自分が学びたいものしか学ばず、やさしい愛情の中で教育されたのである。

他の子どもたちが6、7歳で学ぶことを彼女はずっと遅くなってから13、4歳で学んだとセリーは言いました。でもいったん観察力と記憶力を使うようになると、知識を得たくてたまらなくなったのです。すぐそばにベラックがおり、また祖父も科学に造詣が深かったので、彼女はすぐに完全な無知の状態から、女性としては例外的な博識へと移ったのです。¹⁵

しかし、15歳になった頃から結婚の圧力が周囲からかかり、さらに、頭の働きが衰えてかたくなになった晩年の祖父から精神的な迫害を受ける。祖父の

病気とその死後、心身ともに限界まで追い詰められていたセリーを、ベラックが救い出す。彼はセリーを連れて各国を旅しながら、おもに自然科学を中心とした教育をおこない、彼女の心とからだの健康を取り戻させたのであり、セリーは「1年たったとき、私は自分自身が奇跡のように変わっていることに気づきました。いわば自分の人格の重荷をもう感じなくなり、女の性の呪縛をもう感じなかったのです。¹⁶」と語る。彼女はベラックの教育（これは前述の『アデールとテオドール』の男爵夫人によって批判された「科学への好み」を深めるものであった）により、女性という性の束縛から抜け出し、そのあと自分の知識を生かして祖父の後を継ぐような形で、小さな漁村の人々とその暮らしを守る活動を精力的におこなうようになるのである。この小説はセリーに恋するアルマンの視点から語られるのであるが、小説の終わり近く、彼は新妻セリーについて次のように述べている。

人生のすべてに関して、あたかもそのやさしく深いまなざしが真実の二面を同時にとらえるかのように、ぼくは彼女の中に、どんな試練の際にも真剣で確固とした、心のままに行動して、寛大でいながら慎重な男の友人を見つけたのであった。彼女の心と精神の明晰さは、信じがたいほど完璧なその性格だけによるものだろうか。それとも彼女がベラックから受けた堅固でおだやかな教育のたまものなのだろうか。その両方なのだろう。¹⁷

この引用でまず注目すべきは、アルマンが妻セリーの中に友人、それも男性の友人（ami）を見出したという点である。これは、前の引用でセリーがベラックの教育によって「女の性の呪縛」から逃れたと言っているのに対応するかのようである。『ガブリエル』流に言えば「天使」と呼ぶべきかもしれない、セリーのこの人並み外れた長所について、アルマンは教育と彼女の生まれつきの素質の両方のおかげであるとしているのだ。

ところで、『マドモワゼル・メルケム』には『ガブリエル』のようなジェンダーというものに関する徹底的な問い直しや両性具有についての直接的な言及

はない。だが、「男の友人」セリーを妻とすることになるアルマンについて、画家ステファンは次のように言っている。

あんたはとてもやさしい。知性が繊細で、心が少し女性的なところのあるあんたのような友人がいたならば、おれはそんなに不幸ではなかっただろうと思うんだ。なぜなら、あんたの中にはそれらがあり、あんたの言う理屈は、おれが持ったことのない、でも時々夢見た母親のことを思い出させるからさ。¹⁸

ここではアルマンの両性具有性、彼の心の中に存在する女性性について語られ、そして、この若い登場人物の両性具有性がポジティブにとらえられている。これは、女性となったガブリエルをほめるときでさえ男性中心主義的な物の見方から逃れられなかったアストルフとは全く違う価値観であると言えよう。『マドモワゼル・メルケム』ではこのように両性具有やジェンダーに関する問題を、作者が少し論点をずらしながらユーモラスに論ずるだけの余裕が感じられ、『ガブリエル』に見られる切実な「異議申し立て」とはかなり趣が違っている。

サンドはこの小説の中で男女のジェンダー不平等の問題よりも、もっと切実に現実的だと当時の彼女に思われた、女性にとっての結婚、および幸せな結婚のための条件について考えを巡らせ、それを女子教育のテーマと結びつけている。そして、『マドモワゼル・メルケム』中の女子教育観はアルマンが最後のほうで述べる次の言葉に集約されているのである。

才能に恵まれた女性が成熟する時間を与えられ、また、充実した人生を送るのに十分な発達を遂げるまで待つ辛抱強さが女性にあれば、どれほどの魅力、どれほどの値打ちを彼女が持つことになるかはたぶん知られていない。娘たちはあまりにも早く結婚させられてしまい、子どものままで母親になってしまう。そのうえ、人々は彼女たちが一生子どものままでいるような育て方をしているのだ。¹⁹

5. おわりに

ガブリエルやセリーのようにサンドは幼い時に父と死別し、母とも長い間離れて暮らした。彼女を養育した父方の祖母の方針により、サンドは2年ほどパリの女子修道院で教育を受けたあと祖母のもとに戻り、もともと父の家庭教師であったデシャルトルという男性に教育された。デシャルトルの教育方針は良家の男子並みの知識と教養をこの金持ちの跡取り娘に与えるというものであり、彼女はラテン語や古典のほか自然科学、数学、医学などの基礎を教え込まれ、また乗馬やズボンをはいての狩などもおこなった。この少女時代の体験がのちになってパリで男装の作家として有名になるサンドの基礎となったのである。

修道院での上流階級の娘としての教育と、デシャルトルから受けた男並みの教育について、後年サンドは深く検討し、また男性の服を着ることからくる行動の自由とそれと分かちがたい精神の自由にも思いを馳せることが多かった。『ガブリエル』の最後で、男装の主人公が死ぬまぎわに空に向かって手をさしのべて「神よ！私にあの自由をお返しください。自由というこの言葉を口にするだけで、わが魂は喜びで膨らむのですから」（265）と呼びかける場面には、ジェンダーと衣服と自由の関係が象徴的に表されていると言えよう。

サンドは自分の息子と娘の教育に非常に熱心で、ショパンとともにマヨルカ島に行った時も子どもたちの教育は彼女自身がおこなっていた。その後、子どもたちを寄宿学校に預けたり家庭教師をつける時も彼女がその教育内容をかなり詳しくチェックしていたことが書簡等からうかがえる。『ガブリエル』は執筆当時のサンドの教育というものに対する考えをかなりあからさまに示した小説であると同時に、より普遍的な女子教育や、その基盤である女性の地位やジェンダー不平等についての彼女の問題意識が結実した興味深い作品であることは間違いないであろう。

注

- 1 この作品がそのままでは実際の芝居として上演不可能であることはその長さか

らして明らかである。後年サンドはこの作品を芝居に書き直すことを何度か試みているが、いずれも成功しなかった。

- 2 Veronica Hubert-Matthews, «*Gabriel* ou la pensée sandienne sur l'identité sexuelle», *George Sand Studies*, No.13, 1994, pp.19-27.
- 3 Pascale Auraix-Joncière, «Le dévoilement inutile : enjeux sociopoétiques de la figure de l'androgynie dans *Mademoiselle de Maupin* de Théophile Gautier et *Gabriel* de George Sand», *Romantisme*, No.158, 2012, pp.97-109.
- 4 新實五穂「性を装う主人公 『わが生涯の記』『ガブリエル』」、日本ジョルジュ・サンド学会編『200年目のジョルジュ・サンド』新評論、2012年、25-37頁。
- 5 George Sand, *Gabriel*, Gallimard, Collection Folio Théâtre, 2019, pp.42-43. これ以降、このテキストからの引用はページ番号のみをカッコに入れて示す。
- 6 Théophile Gautier, *Mademoiselle de Maupin*, Le Livre de Poche, 1994, p.240. この作品の翻訳は次による。テオフィル・ゴーチエ『モーパン嬢』下巻、井村実名子訳、岩波文庫、54頁。
- 7 Ibid., p.229. 翻訳は下巻 36 頁。
- 8 Ibid., p.246. 翻訳は下巻 62 頁。
- 9 Madame de Genlis, *Adèle et Théodore ou lettres sur l'éducation*, Presses universitaires de Rennes, 2006, p.74.
- 10 ガブリエルは、その素性を知らないコーム神父でさえ「あの方はまるで聖ゲオルギオスのように馬に乗っていらっしゃる」（156）と感嘆するほどの乗馬の名手である。ちなみに作者のサンドも乗馬好きで、若い頃には全速力で馬を疾走させる喜びを手紙などに書いている。
- 11 マドレーヌ自身が次のように述べている。「魂の性と肉体の性が一致しないことはままあることで、この矛盾はさまざまな混乱を招く要因となります。—例えばこのわたしも、たまたま肉体的に女に生まただけですから、もし女の服を脱ぎ捨てる決意をしなかったら、このうえなく不幸になっていたでしょう。」
Mademoiselle de Maupin, p.319. 翻訳は下巻 178 頁。
- 12 Ibid., p.328. 翻訳は下巻 192 頁。

- 13 Ibid., p.381. 翻訳は下巻 277 頁。
- 14 この小説に関しては次の拙論を参照のこと。坂本千代『『マドモワゼル・メルケム』に見る理想の女性像 ―三十五年後のサンド流ユートピア』、日本ジョルジュ・サンド研究会『ジョルジュ・サンドの世界』第三書房、2003 年、221 - 246 頁。
- 15 George Sand, *Mademoiselle Merquem*, Actes Sud, Arles, 1996, pp.59-60.
- 16 Ibid., p.208.
- 17 Ibid., p.312.
- 18 Ibid., p.247.
- 19 Ibid., p.312.

Gabriel de George Sand ou les problèmes d'éducation

Chiyo SAKAMOTO

George Sand reçut une éducation pour jeunes filles de bonnes familles durant deux ans dans un couvent parisien, avant d'avoir à la campagne un précepteur qui, lui, l'éduqua plutôt comme un garçon de bonnes familles. Après être devenue célèbre comme romancière vêtue en homme, elle réfléchit beaucoup sur les deux types d'éducation qu'elle avait reçus. En même temps, Sand s'occupa avec zèle de son fils et de sa fille. Ses correspondances nous montrent, par exemple, toutes les recherches qu'elle effectuait avant de choisir un précepteur ou une école.

Dans son oeuvre, l'éducation, et surtout celle des jeunes filles, semble être le topique traité le plus souvent, après l'amour et le mariage. Dans cet article, nous avons, à travers un roman dialogué de Sand, *Gabriel* (1839), étudié comment se reflétait l'idée sandienne de l'époque sur l'éducation, ainsi que l'évolution de ses idées entre 1839 et 1868. Plus concrètement, après avoir regroupé et analysé ce qui avait déjà été dit d'important sur ce roman, nous avons examiné « l'éducation mâle et misogyne » donnée à Gabriel. Puis, nous avons approfondi le thème « Gabriel en tant qu'ange ou le troisième sexe », en le comparant avec *Mademoiselle de Maupin* de Théophile Gautier, roman publié à la même époque. Enfin, nous avons, à travers *Mademoiselle Merquem* (roman de 1868), regardé de plus près l'idée sandienne des années 1860 sur l'éducation idéale pour les jeunes filles.

Keywords: George Sand, Gabriel, Mademoiselle Merquem, Gautier, Mademoiselle de Maupin

キーワード：ジョルジュ・サンド、ガブリエル、マドモワゼル・メルケム、ゴーチエ、モ
ーバン嬢